七浦の農業

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050433

3. 七浦の農業

河口 雅季

1. はじめに
2. 七浦の農業
3. タバコ生産の概要
4. 七浦のタバコ産業
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

今回調査を進めていた七浦地区は山間部地域で農業をする家が多く、特にタバコ生産は戦後一時代を築いたという事実が、聞きとりによって浮き彫りになっていった。特に百成大角間、薄野、井守上坂などの山間部に位置する地区でタバコ生産が盛んだった。しかし 21 世紀に入ってすぐに七浦地区におけるタバコ生産はなくなり、現在、タバコ生産を生業にしている人はいない。

聞きとりを進めていく中で、僅かながら、かつてタバコ生産を生業として暮らしていた人に出会った。過疎化の一途を辿るこの地区で、かつて盛んだったと聞く七浦における葉タバコの産業はどのような様相を呈していたのか、また当時のタバコ産業と住民の生活はどのように連関していたのか、そしてどのように衰退したのか、かつてタバコ農家を営んでいて現在も自家栽培をしている世帯を中心に聞きとりを進め、七浦での農業の歴史に組み込み、農業とタバコ生産を考えたい。

2. 七浦の農業

丘陵性山地である七浦地区は、耕地が狭小である。現在は、自家用程度の生産がほとんどで専業農家を営む人はほぼいない。かつて七浦の農業はどうだったか、また現在の状況はどうなっているのか、文献と聞きとりの情報をもとに述べていきたい。

2.1 歴史と概要

『七浦民俗誌』（1996 年）、『新修門前町史　資料編 6 民俗』（2005 年）をもとに七浦地区の農業の歴史や農事暦、収穫物等の概要について記す。

2.1.1 稲作

まず稲作についてであるが、もともと七浦地区は地形的に水利面の制約が大きく、そのため従来稲作はあまり盛んではなかった。戦後から平成 2（1990）年までに山村振興特別開発の一環として 3 度の区画整理が行われた。第 1 次は昭和 43（1968）年度に五十洲で、第 2 次は昭和 51（1976）年度に中谷内、そして第 3 次は昭和 55～56（1980～81）年度に百成大角間で行われた。その結果、当初約 4 : 6 であった水田と畑の比率が約 7 : 3 と逆転した。栽培品種は、ノトヒカリを主力とし、コシヒカリ、コシジワセ、

ホウネンワセも作っていた。モチ米はカグラモチを栽培していた。

年間の農作業の流れとしては、稲作は 4 月から 10 月で作業を行う。4 月初めに田おこしを行う。苗代を作り種籾を蒔く。田植えは、手作業の頃は 6 月初めに行われたが、機械化が進むと 5 月初めに行われるようになった。田植えが終わると除草をお盆の頃まで何度も行う。9 月に入ると田の水抜き、収穫が行われる。刈り取られた稲をハザにかけて 1 週間ほど天日干しする。ハザから降ろした後、脱穀し、脱穀した籾を玄米にする作業、そして精米と短日で行われる。

2.1.2　畑作

七浦地区の農業は昭和 20 年代までは畑作が中心であった。最盛期には一世帯あたり 2 千坪の畑が広がっていたという。しかし、戦後の稲作への転換や農業従事者の減少などにより畑は徐々に減少していった。戦前の畑作物は麦、アワ、キビ、ソバなどの穀類、ジャガイモ、大豆、小豆などの豆類、蔬菜類などであった。このうち、ジャガイモ、麦、大豆などは主に換金物として栽培され、船で輪島や大野（金沢市）などに出荷していた。特にジャガイモは「北海道産のよりも美味しい」と言われていたという。これは七浦海岸部のジャガイモが、水分量が少なく身が詰まっているからである。ジャガイモの栽培は、霜害を防止するため 4 月に植えつけられるところから始まる。芽が出ると「芽揃え」といって、一個に芽を一つ（普通は切り虫などの被害を考慮し、二本）にする。そして、追肥し、軽く土寄せをする。本来は「小土寄せ」だけでいいのだが、倒伏やイモが土から顔を出し日光に当たるのを防ぐために行う行程である。日に焼けた「青いも」は腹痛を引き起こすという。そして 7 月に収穫をする。ジャガイモは連作を嫌い、自家採種の種芋は収穫量が落ちるという。それで種芋は農協などから購入するのである。かつては、質より量を重点に「男爵」を栽培していた。また、大正から昭和初期にかけては主として大麦の栽培に力が注がれた。五十洲では平均約 30 俵の収穫があったという。戦中から戦後にかけては木を伐採して畑を広げ、小麦を栽培した。しかし、拡張された畑は農業従事者の減少とともに使い道がなくなり、昭和 30（1955）年頃から一部は杉や松が植林されるようになったが、そのまま放置されてしまった畑も多い。

2.2　七浦の農家数の推移

かつて、商品作物としても農作物を出荷するほど田畑と農業従事者がいた七浦だが、現在は高齢化の影響で辞めてしまった人々、人口減少で荒地になってしまった田畑も多い。農林水産省がまとめた『農林業センサス』において、農業を行なっている世帯が 2010 年時点で存在している、薄野・井守上坂、百成大角間、中谷内、矢徳の 4 集落の農家数（表 1）、農業就業人口（表 2）、経営耕地面積（表 3）、経営耕地面積規模別農家数（表 4）の合算推移を以下にまとめた。なお、1960 年の経営耕地面積（表 3）の数値は表示単位の相違により、小数点以下を四捨五入した数値とした。

表 1 を見ると、少子高齢化、出稼ぎによる人口減少の影響を受け総戸数、総農家数ともに 50 年間で緩やかに減少していることが分かる。また総戸数に対する総農家数の割

表 1　七浦地区 4 集落の総農家数

	総農家数	専兼業別農家数		
		専業農家	第一種兼業農家	第二種兼業農家
1960	85（91）	16	50	19
1970	82（87）	5	46	31
1975	79（87）	8	30	41
1980	77（86）	13	13	51
1985	70（86）	10	8	52
1990	67（85）	10	7	50
販売農家	57	8	7	42
1995	61（85）	12	4	45
販売農家	48	8	3	37
2000	44（74）			
販売農家	44	12	1	30
2005 販売農家	39（74）	10	3	26
2010 販売農家	30（64）	15	5	10

（ ）は総戸数　　出典: 農林水産省『農林業センサス』

合も 1960 年の 9 割以上から半分以下に落ち込んでいる。しかし、専業農家数はその影響を受けず、1960 年（16 戸）と 2010 年（15 戸）ではほぼ変わらない結果となっている。

1960 年時点ですでに、兼業農家数（69 戸）は専業農家数（16 戸）を大きく上回っていた。そして 1975 年からは第二種兼業農家が第一種兼業農家を上回るようになった。農業就業人口を見てみると、1960 年 265 人から 2010 年 45 人と約 17%に減少した。1960 年（265 人）から 1995 年（61 人）までは連続して減少し 2005 年（51 人）に若干増加するが、2010 年（45 人）には再び減少している。総農家数（表 1）に比べ就業人口の方が、減少率が大きいことがわかる。

また、男女別で見ると 2010 年の男性 25 人、女性 20 人を除き 1960 年から 2005 年までは男性よりも女性の方が多い。特に、高度経済成長期の 1960 年から 1975 年までの男性の農業就業人口は 128 人から 49 人と出稼ぎによる減少は著しい。一方、女性の農業就業人口は同時期に 137 人から 90 人と、減少傾向にはあるものの、男性と比べると激しい減り方ではない。

年齢層で見ると、女性に関しては 1985 年まで 40～59 歳の農業従事者が最も多いが、1995 年以降は 65 歳以上の高齢者が、最大の農業従事者層を占めていることがわかる。一方男性は、すでに 1980 年代から 65 歳以上の高齢者が農業従事者層を占め

ている。

表 2　七浦 4 集落の農業就業人口（単位: 人）

	総計	男						女					
		計	15-29	30-39	40-59	60-64	65-	計	15-29	30-39	40-59	60-64	65-
1960	265	128	104			24		137	107			30	
1970	187	67	4	14	27	10	12	120	18	22	49	13	18
1975	139	49	2	5	17	8	17	90	8	19	39	10	14
1980	108	36	-	-	14	4	18	72	5	10	29	8	20
1985	74	30	-	-	7	8	15	44	-	3	19	5	17
1990	72	23	-	-	4	2	17	49	-	4	15	12	18
販売農家	61	19	-	-	4	1	14	42	-	2	15	11	14
1995	61	20	1	-	3	-	16	41	-	1	10	6	24
販売農家	45	12	-	-	3	-	9	33	-	1	10	4	18
2000													
販売農家	47	18	-	-	-	3	15	29	1	-	5	3	20
2005　販売	51	26	-	1	-	1	24	25	-	-	2	6	17
2010　販売	45	25	-	-	-	4	21	20	-	-	-	2	18

出典: 農林水産省『農業センサス』

表 3　七浦村 4 集落の経営耕地面積（単位: a）

	計	田	畑	樹園地
1960	6,704	3,180	3,518	5
1970	6,650	2,890	3,750	-
1975	6,047	2,761	3,231	55
1980	5,322	2,394	2,795	133
1985	4,714	2,488	2,216	10
1990	4,078	2,340	1,680	58
販売農家	3,875	2,198	1,623	54
1995	3,618	2,202	1,332	84
販売農家	3,319	2,000	1,246	73
2000	3,012	2,017	937	58
販売農家	2,802	1,860	820	57
2005 販売	2,647	1,807	820	20
2010 販売	2,306	1,450	763	93

出典: 農林水産省『農業センサス』

表 4　七浦村 4 集落の経営耕地面積規模別農家数（単位: 戸）

	0.3 ha未満	0.3-0.5ha	0.5-1.0 ha	1.0-2.0 ha	2.0-3.0 ha	3.0-5.0 ha
1960	7	11	42	25	-	-
1970	9	21	23	27	2	-
1975	16	19	21	19	3	1
1980	17	24	21	19	3	1
1985	11	25	24	5	4	1
1990						
販売農家	-	28	22	4	1	2
1995						
販売農家	-	20	23	2	3	-
2000						
販売農家	-	16	16	3	2	-
2005 販売	-	19	19	4	1	-
2010 販売	-	8	16	4	1	-

出典: 農林水産省『農業センサス』

経営耕作面積は 50 年間で一度も増加を見せず減少し続けている。畑は 1960 年（3,518a）から 1980 年（2,795a）まで田を上回っているが、1985 年以降逆転している。これには先に述べた区画整理による影響があるだろう。減少面積もその 20 年間で田が約 800a ほどに対し畑は約 1,300a と差が大きい。

また経営耕地面積規模別農家数を見ると、年代が進むにつれて耕地面積を縮小させていることがわかる。これは高齢化による生産力の低下や商品作物から自作農へとシフトする人びとが増えたためだと推測することができる。七浦村では農業法人の設立はされていないため、特に広大な耕作面積を持つ農家も見られない。

1960 年代以降は全国的に米余り状態となる中で米作縮小の動きが見られ、さらに農家の兼業化、機械化、高度経済成長期における出稼ぎ労働者の増加、それによる地方の人口減少なども相まって農業就業者や農作物生産量は減少の一途をたどっている。

2.3　七浦の農家の現状

七浦の農家は現在どのように生活しているのか。聞きとりをもとに現状をまとめたい。

S さん（井守上坂、男性、80 歳代）

昔、畑で大麦、小麦、豆、小豆、栗などを栽培していた。今では耕作地で自分たちが食べる分と、「道の駅」に置くための野菜を栽培している。「道の駅」には、かぼちゃ、らっきょう、ズッキーニを主に持っていくが、冷房がないため日持ちしない。また、田はかつて 3 反 5 畝を所有していた。今は 1 反 7 畝を所有している。

O さん（井守上坂、男性、80 歳代）

現在 5 反の田を持ち、そのうちの半分を稲作に充てている。同集落内ではほかに、3 軒が田を所有していてどれも同じくらいの規模である。また、機械の共同購入はしていない。米は主に、コシヒカリやノトヒカリを作っている。法人化の話も持ち上がったがうまくまとまらなかった。畑では自分が食べる分だけの野菜を作っている。獣害は主にイノシシである。電気柵をしていて、4 月に申請すると補助が出る。同集落内では昨年、高齢により 3 軒が農業をやめている。

T さん（矢徳、男性、70 歳代）

田と畑それぞれ 5 反ずつ所有している。畑では自分が食べる分だけの作物を育てている。有名なものは矢徳ネギ。土がネギの育成に向いている。2008 年当時は同集落内で、7 軒が農家だったが、現在は 4 軒のみで、肥料や機械といった金銭の問題と高齢化などで、担い手がいない状態である。

K さん（薄野、男性、80 歳代）

薄野の田んぼは小さく、水が少ない土地で耕地整理する以前は機械を入れることができなかった。平成 10（1998）年にうちの田畑は耕地整理を行なった。同集落内で農業をしているのは自分一人だけ。自分が食べる分だけ 4 反作っている。昔、米以外では、粟やキビなどを作っていた。また畑では、父とともに葉タバコを 10 年ほど作っていた。葉タバコの前はジャガイモを作っていた。葉タバコは七浦全体で流行っており、盛んに作られていた。

このように、農業に携わっている人々もそのほとんどが自分の食べる分しか作っておらず、商品作物として七浦で農業を行う人は皆無と言える。では、『農林業センサス』に現在記録されていない、他集落の人々は農業にどのように携わっていたのか。また、現在自作農として田畑を作っているのか。こちらも聞きとりをもとにまとめた。

N さん（五十洲、男性、70 歳代）

五十洲は七浦で最初に田んぼが全てなくなった集落である。今から 3 年前のことである。田んぼだった土地は現在畑になったが、畑も草が生い茂りイノシシやハクビシンの遊び場になっている。

B さん（皆月、男性、50 歳代）

皆月では、畑は色々なものを自分たちが食べる分だけ作っている。土地のない人は借りて畑をしている。また鵜山では、葉タバコを生産していた畑は今はブドウ畑となっている。ブドウは潮風にあたって美味しく出来上がる。田んぼは昔、2〜30 軒やっていたが現在は 2〜3 軒のみとなっている。法人化や農具の購入などの動きは見られない。獣害の主なものは、イノシシで鉄線を張るなどの対策はしていない。そのほかにイタチやタヌキが山にいるようである。

H さん（大滝、男性、80 歳代）

機械などにお金がかかることや、かつて害虫の被害に悩まされたこともあり田んぼで

の稲作は辞めた。鵜山にも田んぼを所有しているが皆月の人に貸し出している。畑では、主にジャガイモ、サトイモ、ソバ、大豆、小豆といった作物を作っている。作った作物は親類に送ったりしている。自分の畑では害獣の被害はないが、大滝でも山奥の方ではイノシシの被害があるようだ。

以上のように『農林業センサス』に記録のない集落でも個人的に田畑を耕作し、自家消費したり親類に送っている家がある。また、集落間を越えて土地の貸し借りも行なっており、七浦の住民が互いに生活を支え合っているという一面も垣間見ることができる。聞きとりを行なっていく上で、住民の多くが以前葉タバコ生産を営んでいた土地に農作物を植えているという話が上がっている。かつて七浦では葉タバコが一世を風靡したということだ。現在では皆無となってしまった七浦の葉タバコ産業はどのような様相を呈していたのか次節以降で記述していきたい。

3. タバコ生産の概要

はじめに葉タバコが七浦地区を含む門前町に流入し、衰退した過程、生産方法といった概要を記す。さらに参考として大枠で輪島市における生産傾向を七浦で調査した際に得られた情報や文献資料等の情報をもとに作成する。

3.1 門前町におけるタバコ生産の歴史

『新修門前町史 資料編 6 民俗』（2005: 92-93）では門前町で葉タバコの生産が開始されたのは昭和 22（1947）年だとされる。「専売局」による耕作奨励によって本郷地区で始まった。昭和 28（1953）年に諸岡地区、その後七浦地区、昭和 30（1955）年頃には剱地地区へと拡がっていった。戦争直後はタバコが不足し、配給制であったため耕作が奨励された。それまでの畑仕事は大麦と大豆が主だった。

葉タバコ栽培は許可制で、植え付け面積の検査があった。専売公社から種子を供給され、植え付け面積の超えたものは苗を抜き取られたという。配給が続いている間は、収納した後に葉タバコを隠していないか監視官の家屋検査があった。門前町で最初に葉タバコ栽培が流通した本郷地区では、昭和 22（1947）年から 2 年間ほど「バーレー種」と呼ばれる品種を栽培、屋内干しで乾燥していた。農薬がないので虫害に悩まされた。その後 2 年ほど、鶴来地方で栽培されていた「松川種」と呼ばれる品種を栽培する。これは天日干しであった。昭和 26（1951）年あたりから、「黄色種」と呼ばれる品種が栽培され、乾燥場で火力乾燥する方式へと移り変わった。その後 5～6 年経つと、それまでの薪中心の燃料から石油へと変わりバーナーを用いるようになった。昭和 50 年代中頃には、全国的に健康面から喫煙を控える風潮が高まり、耕作許可面積が減らされたことから、門前町では現在数軒が耕作しているのみで、先に述べたように七浦地区はゼロとなっている。

3.2 葉タバコ栽培の作業過程

『新修門前町史 資料編 6 民俗』（2005 年）の情報に加える形で、タバコ農家の年間

スケジュールを提示する。

2 月上旬	温床作り、種まき。
3 月下旬	他の温床に苗を移植。
4 月下旬	畑に定植（本植え）。以後、夏の収穫まで消毒、施肥、わき芽かきなどの作業。
7 月上旬 ｜ 8 月下旬	収穫。幹の下葉からかく。 一枚一枚縄に挟んでいく。乾燥場で 4〜5 日間火力乾燥する。
9 月〜	乾燥場の選別作業（土に近い場所から、土葉、土中、本葉、中葉、天葉に分類し、さらに特等から 下は 4 等に分類。分類分けは専売公社の「標本」に基づく。指導員が巡回して指導した。）
10 月〜	最寄りの収納場へ納付（出荷）。収納地は各地を公平にローテーションしていた。門前町からは穴水のタバコ収納場が最も近かった。
12 月〜	タバコ生産はおやすみ。

作業過程で最も重労働なのが葉の乾燥である。まず 32 度〜33 度の温度で採取した葉を生乾きにする。この温度は上げすぎても下げすぎても葉が痛むため温度管理が重要である。それを終えると今度は葉を吊るし葉脈を乾燥させる。この工程は時間がかかる。機械化されるまでは人力で葉を吊るし、薪を炊いて乾燥させた。後には乾燥場を設けて灯油で火をおこし 4〜5 段に分けて葉を乾燥させた。そして乾燥場は共同で使うようになっていった。

12 月からはタバコ精算はお休みになったが、タバコ生産からの収入のみでは生活ができないため、出稼ぎに行く家庭がほとんどだった。Y さん（中谷内、女性、60 歳代）は、このオフ期間には出稼ぎに行ったり、次に使う畑の整備をしたりしたという。

4. 七浦のタバコ産業

何かと規制は厳しかったが収入は大きかったタバコ生産だが、輪作を嫌う葉タバコは病害が起こりやすく収穫が落ち、葉タバコ栽培をやめ綿花栽培に転じる農家も多かった。そのため昭和 45（1970）年前後から葉タバコ農家は減少に転じることになる。以下では、文献資料に加えて聞きとりで得られた情報をもとに、七浦における葉タバコ生産の変遷について述べる。

4.1　専売公社時代（1949−1985）

明治 31（1898）年に「日本専売局」が誕生する。これは専売公社の前身で政府が国内葉タバコ独占のために設立したものである。昭和 24（1949）年、日本専売公社とな

る。

写真 1 共同乾燥場外観

写真 2 共同乾燥場内部（2017 年、百成大角間、筆者撮影）

U さん（百成大角間、男性、60 歳代）

七浦に葉タバコが流入したのは昭和 29（1954）年に Y さん（中谷内、女性、60 歳代）の父が始めたのがきっかけだ。小学生の頃から父母の手伝いをよくしていたが、最盛期では一人当たり 1 町以上は土地を所有してタバコを栽培していた。七浦全体では 70 町ものタバコ農場があった。初期には収穫した葉を薪で火をたき自分で乾燥させていたが、近隣のタバコ農家で出資し共同乾燥場（写真 1、2）を設け、灯油を燃料に乾燥させていた。しかし 20 数年やっていて黒字はほとんどなかった。周りにも儲けていた人はほとんどいないと記憶している。

Y さん（中谷内、女性、60 歳代）

最盛期には 1 町 8 反もの土地で葉タバコを栽培していた。昭和 40（1965）年に乾燥場を設立し、最終的にそれは共同乾燥場になった。専売公社時代では最高 5～60 万もの反収があった。商品作物として皆こぞって葉タバコ生産に手を出していた。しかし、収入の割に重労働であった。朝は早く夜は遅い。キリ虫やネコといった害虫や害獣を駆除する手間もかかった。農薬の制限も厳しいのでなかなか根本的な解決に至るのは厳しかった。

4.2 JT 時代（1985–）

昭和 59（1984）年に「日本たばこ産業株式会社法」が制定された後、翌年 4 月に日本たばこ産業株式会社が設立された。これにより、日本のタバコ市場が海外メーカーに開放されることとなった。ちなみに JT と銘打たれるのは、昭和 63（1988）年にコミュニケーションネームとして発表されて以来である。

Y さん（百成大角間、男性、60 歳代）

量より質を重視していた専売公社時代は生産量が少なくても特等や 1 等といった質の高い葉を生産することである程度の収入を維持できた。また不作時に 1 反あたり 15～6 万の農業災害補償があったが JT に変わるとその補償はほぼなくなってしまい、葉の質より量を重視するようになった。全国的に禁煙が叫ばれるようになってその量も減

らすように促され、さらに質の悪い葉が多い年だと収入はかなり悪くなり、次第にタバコ生産をやめる農家が増えていった。減反政策による戸別所得補償金はそこそこもらうことができた。JT に変わってタバコ生産をやめてしまう人もいた。

戦後、七浦地区ではタバコ生産に火がつき、最盛期とみられる昭和 45（1970）年の『石川県農林業』によると輪島市での小売人数が 111 人はだったが、そこから次第にタバコ生産従事者は減っていき『七浦民俗誌』（1996 年）によると、平成 2（1990）年頃には 6 人と報告されている。そして U さん（百成大角間、男性、60 歳代）によると平成 10（1998）年頃を最後に七浦でタバコを生産する人はいなくなった。

4.3　タバコ生産への思い

ここでは聞きとりにもとづき、七浦の人々のタバコ精算への思いを記述する。

U さん（百成大角間、男性、60 歳代）

親の生活を見ていても過酷さが子供ながらに伝わってきた。朝は 4 時くらいに出て行き、夜は遅くて 23 時くらいに帰ってくるという生活をしていた。農薬に関しては、基本的に農協から推奨されたものを自分たちで購入し利用していた。DDT といった人体にも影響を及ぼす強い農薬も、規制されるまで使っていた。今現在周りに住んでいる人を見ると体が弱っている人も多い。昔こうした農薬を使っていたからこんな風になってしまったのではないか。タバコ生産は人の体にも負担をかけるリスクの高い仕事だったと思う。一方、小さい頃からタバコ作りに携わってきたので自然とタバコ自体に興味を持った。自分の収穫した葉がどのようにタバコへ加工されていくのか倉庫をちらっと見たこともある。一本のタバコができるまで、ある銘柄は何ヶ月もかけて加工する。そのことに驚いた記憶がある。

Y さん（中谷内、女性、60 歳代）

とにかく重労働だった。重労働のわりに、見合った収入を見込めないのでやめていく人は多かった。しかし当時はある程度農業災害補償もされていたので魅力的な生業だった。また、収穫し収納場へ持って行き、換金する日はとても嬉しかった。給料を携えて普段食べられないような肉などのご馳走を買って帰った。

5. 考察

七浦の農業の特徴や変遷を追っていったが、明治から戦前にかけては水田と畑では畑の面積の比率が大きい。しかし、戦後は水田の面積が逆転し拡大されているということが文献資料等で明らかになった。本来区画整備のされていない七浦の土地は稲作に向いていないため、必然的に畑作に力が注がれたのだろう。そして、水田の区画整備が始まったが、特に中谷内、百成大角間で行われた第 2、3 次の区画整備はその間のスパンが短い。それらの集落では葉タバコ生産が特に栄えている場所だったがこの頃にはそのブームが下火となっている時代である。そういった要因から、水田の整備事業が急がれたのではないかと考える。

次に七浦地区での葉タバコ生産について傾向を考察したい。まず、七浦地区でタバコ生産が始まったのが昭和 29（1954）年である。そして終わったのが平成 11（1998）年と非常に短命である。聞きとりを行う中で、現役でタバコを生産する人はいなかったが、かつてその短い期間の中で葉タバコ生産を行なっていたという人に話を聞くことができた。数少ないものではあったが皆、口を揃えて重労働であまり割に合わないということであった。先に述べたように、昭和 45（1970）年に輪島市で 111 人の葉タバコ小売業者がいる中で七浦地区では約 50 人もの葉タバコ生産者がいたということで、まさに七浦で一斉を風靡した生業であったことは間違いない。しかし、生産に従事する人が誰もいなくなってしまったのは過酷な労働環境、世間の禁煙ブームによる減反政策、高齢化による人口減少という事実を見れば仕方なかったと考えられる。

6. おわりに

タバコ生産を始めとした農業の歴史を追ってきたが、聞きとりをさせていただいた方々は当時のことを懐かしみながら丁寧に教えてくださった。現地へ赴く前に農業センサスを初めとした参考資料で得た情報は、地方の農家が以前と比べ縮小していると伝えていた。しかしながら、実際に現地に住んでいる方々に話をうかがうと自分で食べる分、他の家庭や、道の駅におすそ分けするために楽しみながら農作物を作っている感じが伝わってきた。またタバコ生産では、大変な思いを語ってくださり、自分が思っているよりも生産者がどれだけ苦労されて作っているのか知るとてもいい機会となった。紙媒体で得る情報には正しいことは書いてあるが、実際に足を運んでどのような思いで農作業を営んでいるのかという背景を知ることはできない。今回、調査ではそのような思いを様々な方が話してくださった。

こうして一時代を築いた葉タバコ生産をはじめ農業にかけた思いや体験を、拙文ではあるが残せたら幸いである。

最後に、この調査に貴重な時間を割いて協力して下さった七浦のみなさまに深く感謝し、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。